

# 菽 祭

——旅人追想——

## 川 口 常 孝

旅人が妻大伴郎女を伴って大宰府赴任の途についたのは、神龜四年(三七・三六)の交、齡六十二・三才のことであった。あるいは四年十二月といふ、あるいは五年四月といつて枝葉の点は明瞭でないが、六十を越えた老体に鞭うって、この頃瀬戸内海を西下したことは疑いない。

かれには一つよろこびと一つのかなしみとがあつた。よろこびは、父安麿が大納言にして兼ねた大宰帥の地位を、ほど同年齡にして子われも襲いうるといふ、先考への敬慕にかゝわるものであつた。それは、旅人自身、養老四年(三三)三月征軍人持節大將軍となつて九州に赴き、凶徒をして敦風に靡かしたかゞやかしい思い出とも無関係ではなかつた。従つてこの度の赴任は、父祖の業の確認である半面、旅人おのれの、心のときめきにも似た自足感になつてゐた。

かなしみは一層重要な相貌を呈してゐた。旅人遷任の事情は、今日明確な資料を欠くが、ある程度たしかな想像をほどこすことは不可能でない。表向きのそれとしては、神龜四年十月六日、参議として六年の勞を積んだ阿部広庭が中納言になつて居り、旅人の中納言もとのまゝでの帥任命は、この広庭の昇任と何らかのかゝわりがあ

らうかと思われる。広庭が因で旅人が果か、旅人が因で広庭が果か、それはいづれとも決定しがたいが、次下に述べるような政界の事情が、名族出の二人の運命を左右したのであることは、たやすく想像できる。

時の政情を眺める前に、大宰府の職掌についての瞥見を行つておこう。大宰府は令の制で筑前国御笠郡に置かれ、筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、対馬の九国二島を管領し、兼ねて隼人や外国に対する武備、蕃客との応接饗燕、帰化人の処理などを掌つた。帥はもとよりその長官である。父安麿が帥になつたことはすでに触れたが、金村以来、一族が半島遠征や外客応接にしばしば携つてきてゐることからみて、たとえ旅人に漢文の力不足といふような弱点があるにしても、かれがこの職掌にたずさわること(註2)は、さしてはなほだしい逸脱ではなかつたはずである。従つてまた流滴左遷のそれでないことも、諸家の一致して説くところ(註3)である。

さて旅人を大宰府に押し出した力は一体何であつたらうか。そもそも大伴家は、天忍日命、道臣命、武日連以下代々武將の家柄であり、談、大連以後は新羅任那派遣將軍として名をせ、壬申の乱に

は大和方として馬來田、吹負等の活躍が史上に著しく、以下次々陸奥守鎮守府將軍を兼ねた。武將にしてかつ蕃客との応接処理、これが大伴家をつらぬく基本の性格である。

その名流大伴家が、新興の藤原氏の圧迫を感じ出したのは、旅人の父安磨のころからであつた。しかし安磨の時代には、まだ壬申の乱の余慶があつた。それが慶雲・和銅のころになると、乱の功勞者がほとんど死去して、壬申の乱は歴史的事実として、人々の記憶の中で種々の変容を上げはじめた。安麻呂が薨じたのも和銅七年(七四四)、まさにこのように「戦後」が結終を遂げようとしているときであつた。この年旅人四十九才、従四位下左將軍であつた。四年前(和銅三年、七一〇)四十五才。旅人の名が史上に見える最初の年)の正月、天皇が大極殿に御し、朝を受けたとき、正五位上左將軍旅人が皇城門外朱雀路を東西に分れ、騎馬を列ね、隼人蝦夷等を率いて行進し、正三位大納言安麻呂が、旅人の左將軍ぶりを聞した(であるう)ことがあつたが、このころが大伴家に一応の安定がおとずれ、安麻呂・旅人父子に栄光の静謐が満ち満ちていた日々であつた。

養老四年(七三〇)八月三日、一代の権臣藤原不比等が薨じた。不比等の四子武智麻呂、宇合、房前、麻呂は、それぞれ南家、武家、北家、京家を称し、みずからの権威を扶植するとともに、藤原氏の隆盛を用意しはじめていた。かれら兄弟のあとにやがて首皇子(聖武天皇)を生む官子媛が居り、またやがて聖武天皇の皇后となる安宿媛(光明子)がいた。

明けて養老五年(七三一)正月、旅人は武智麻呂・房前とともに従三位に叙せられた。かれらは旅人よりも十数才(武智麻呂は十五才)若かつたが、武智麻呂は同時に中納言になり、房前は従四位上

からの昇叙であつた。

大伴氏もさることながら、藤原氏が對抗勢力としてもつとも意識したものは、不比等薨後の空隙をうずめるために、習四日をもつて舍人親王を知太政官事に任じ、新田部親王をして知五衛及授刀人事となした、これら皇親政治——臣下を政府の要職に任ずることなく、政府首脳部を主として皇族によつて固めようとする——の担当者であつた。征者隼人持節大將軍として九州にあつた旅人は、不比等の病重きを加えた時召還されて京にいたし、白鳳体制——白鳳は皇親政治のもつとも見事な開花期であつた——復活の兆によつてもしも出されつゝあつた新しい情勢を、かれもまたおぼろげながら察知してははずである。

この皇親政治の帰趨は、長屋王に次第に焦点をしぼって行く。舍人、新田部、また舍人のあとを受けて知太政官事に任じた刑部、穂積と、四親王いづれもが天武皇子であり、養老五年、大納言正三位から右大臣従二位に進み、いわゆる長屋王時代を開幕する長屋王が、天武皇孫であることを思えば、白鳳体制への復帰の意味・内容が、期せずして分明になるであらう。養老五年というこの年は、先にも記したように、旅人、武智麻呂、房前が肩を並べた年でもあり、旅人にとってはまさに運命的な転機年であつたということにならう。この年三月、長屋王に帯刀資人十人を賜い、旅人もまた武智麻呂や同じく中納言であつた巨勢邑治とともに四人を賜つた。

もつとも令の規定によれば、三位には資人六十人を賜わる定めであるから、統紀のこの記事は、その中の四人が帯刀の資人であつたということであらう。<sup>(註4)</sup>

旅人が再度大宰府へ赴いたのは、このような皇親政治復活の氣運

## 祭

## 萩

が、内部の不安をはらみつゝも、一応軌道に乗ったかに見えたときであった。旅人と長屋王の關係についての諸説は、いずれも臆測の範圍を出ないものであるが、興隆せんとする藤原氏に対する共通の疎外感が、壬申の功臣大伴家の氏の上と、その戦亂の勝利の指導者の裔孫とを近接せしめたかも知れないという可能なる推論を許す。長屋王の知遇を得た人々に、學問文雅の士の多かつた事実も、長屋王と旅人の接近を推測せしめる一つの根拠になるかも知れない。王はしばしばその邸（佐保の地名をとつて作宝楼と名づけられた）に文人を集めて詩筵や歌会を催し、特に新羅の使節を迎えたときの詩篇は懷風藻に多数伝えられている。その厚遇を受けた人々の名前をあげると、佐為王、伊部王、紀男人、日下部老、山田三方、山上憤良、朝來賀須夜、紀清人、越智広江、船大魚、山口田主、樂浪河内、大宅兼麻呂、土師百村、塩家吉麻呂、刀利宣命などである。これらの人々はいずれも東宮（後の聖武天皇）に侍せしめられている。中でも憤良と百村とは、やがて梅花の宴にも名を列ねるのであって、この辺の人間關係を共通項にして、あるいは王と旅人との密接な關係をいうことができるかも知れない。<sup>(註5)</sup>しかしたとえ両者の接近があつたとしても、それが政治的・同志的のものでなく、一種心理的のものであつたろうことは、恐らく否めまい。少くとも旅人のがわからはそうであつたろうと思われる。

とにかく躍進をはかる藤原氏にとつて、長屋王の存在は目の上の瘤であつた。長屋王事件が徐々に構築されつゝあつた。王は消されねばならなかつた。それに付伴するかなりに大きなさ、こで大伴氏もあつた。旅人の帥任命は、政治の中心からかれと遠ざけようとする策謀として行われたという見方を成立せしめる根拠が、たしかにこ

らの事情にはあるのである。だから、実は、前記した阿部広庭と旅人との押し出しごっこが問題であるのでなくて、二つの名族をたやすく支配することのできた藤原氏の勢力に、命運の分岐がかけていたということが重要なのである。

一応筋の通つた任命のまゝに、旅人は黙々と九州に去つた。大納言昇任の希望は、程遠いことであつた。それにもまして、ゆえわかぬかなしみがかれの胸にあつた。

妹と来し敏馬の埒を還るさに独して見れば涕ぐましも（巻三、四九）

往くさには二人わが見しこの埒を独過ぐれば情悲しも（同、四〇）

三年の後、帰京の途上（天平二年十二月、七四〇）、亡妻をしのんで旅人はこのように歌つたが、こゝから逆推される赴任の旅も、決して心楽しいものではなかつたであろう。老いた夫婦が相寄りあつたあつて、辺陲の地に赴いて行く姿がまさまざと浮んで来る。往くさには二人であつたが今は一人であるという、妻の死にしぼられたかなしみだけでなく、二人いるときにもなお存在したかなしみの影が、純無垢にしてとゞおることのない声調から、しみじみと伝わつて来る。かりそめにも正三位中納言兼大宰帥の行旅である。扈從も眷屬もいたであろうし、どれほどかのきらびやかさは随伴したであろうに、かれの作品からにじみ出てくるものは、一人旅人の悲傷の声であり、氏族の長としての自負も、政府高官の一人としての權威も、一切がかれの詠作の根基にはない。これは旅人の全作品をおおう著しい特徴であるが、稟質から流れてくるものだけが、そして、稟質に融化されて行くものだけが価値の名に値するのであ

つて、今、公の旅のさなかにあつてもその原則が息づくのである。妻の死の事実を現実の諸条件からぬきとつた、何もなかへの満たされぬ思慕を追つて行く無形の作品をこゝに想像するならば、敏馬を(過ぎる)往路の旅人の心情をくみとることができようであらう。海路三(註7)十日、静かに風いだ、幾分曇り気味の日々で、それはあつた。

大宰府着任後の旅人を襲つた最初のいたましい体験は、右の歌によまれたように、妻大伴郎女の死であつた。「しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月もいまだあらねば」(巻五、七四)と憶良が歌っているが、それは旅の疲れを休める間もない、到着後さして日数を経過しないころのことであつた。「妹が見し棟の花は散りぬべしわが泣く涙いまだ干なく」(巻五、七五九。右反歌)——庭では淡紫色の棟の花が散り始めていた。このころから旅人の作歌はにわかに数を増して行く。

旅人の創作をうながした直接の動機が、憶良との接触にあつたうことは、ほとんど疑いをさしはさむ余地がない。あるいは憶良に嚮(註8)導されてといひ、あるいは反撥関係を持しながらといひ。恐らくはそのいずれでもあつたろうが、旅人は元来意識的に——みずから進んで、また半職業的に——歌を作る人ではない。万葉集における年次分明歌の初見は、ようやく神龜元年(三三)三月一日、吉野徒駕の折の作(巻三、三一五・三一六)で、齡すでに五十九才に及んでいる。もとよりそれ以前にも製作はあつたろうが、家持の父にして集中に所見の乏しいのは、質量ともにそれが本格的なものでなかつたことを裏書きするのであらう。ゆえに、辺境にあつて悶々やる方なき旅人に、筑前守憶良の存在は、大きな刺激となつたろうと思われ。かれは憶良に引きずり出されて歌をよみはじめた。謂わばそ

の外発性を支えた内発の力こそ、妻郎女の死であつたのだ。旅人の孤愁は従来を破つた。生得の詩質を、かれは万葉集に残しはじめるのである。

しかし、シテな日々はもう遠く去つていた。父祖の功業も、禁衛に騎馬をひきいた往年の気魄も、こゝ西辺に三軍を叱咤した思い出すらも、何か遠い過去の出来事に属していた。かれは息家持がやがてするのであらうように、武人としての家柄を誇ることをしなかつた。国家の隆昌をことほぐことをしなかつた。小武石川足人が「さす竹の大官人の家と住む佐保の山をば思ふやも君」(巻六、七五)と問いかけたとき、「やすみしわが大王の食す国は大和も此処も同じとぞ念ふ」(同、七六)と答えつゝも、防人司の佐大伴四綱の問いかけ——「藤浪の花は盛になりけり平城の京を思ほすや君」(巻三、三〇)——には、「わが盛また変若ちめやもほとほとに擧樂の京を見すかなりなむ」(同、三三)以下五首の望郷の歌をもつて答え、前者(七五)の公的生活に力点を置いた亢奮のなさに對し、後者(三三)は二段構え(二句切れ)の反語法をもつて珍らしくも家郷恋しさの切情を示し、平素の本音のあり場所を端的に示すに至つてゐる。當時「あをによし擧樂の京師は咲く花のほふがごとく」(巻三、三二八——小式小野老)前古に例を見ない文化の爛熟の相を呈して居り、身世を大観したいぶし銀の旅人の世界に、なおかつあこがれの湧いてやまぬ所以と意味を照らし出していた。

今や妻も都も、ともに、はるかに遠いところにあつた。思慕と思郷と。総じて何ものかへの強い郷愁——それは大宰府赴任当時におけるゆえわかぬかなしみの、今日におけるあらわれでもあつた。大和にいたころ交渉のあつた、随分と年青い丹生女王を思い出し

て贈り物をする事もあったが、「古りにし人の食さずる吉備の酒病めばすべなし貫箕賜らむ」(巻四、三三)といった返しがあつて、はなはだしく戯咲めいた關係に解体して行くほかなさそうであつた。妻のなきあと下向してきた妹大伴坂上郎女に、旅人はおとなしく身辺の世話をゆだねていようと思つた。かれは変な「賢しら」を人にも自分にもすまいと思つた。憶良の説教さたもかれには少し煩わしかった。一切は無為自然、そして虚無に通じて行くようであつた。

世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

(巻五、五三)

祭 長屋王の変が報じられたのは、この年(神龜五年)あけてほどないころであつた。

事件はこうであつた。神龜五年九月、安宿媛腹の皇太子夭折のことがあつた。ひどい打撃を受けた藤原氏は、若い聖武天皇の悲嘆を巧みに利用して、長屋王抹殺に着手した。かれらは漆部君足、中臣東人らの、左大臣正二位長屋王がひそかに左道を学び国家を傾けようとしているとの密告をとりあげ、六年(三三)二月十日夜、三関を固く守らしめるとともに、式部卿三位宇合らが六衛府の兵をひきいて王の宅を包圍、翌十一日中納言正三位武智麻呂は一品舍人親王、新田部親王、大納言多治真人池主、右中弁小野朝臣牛養、少納言巨勢朝臣宿奈麻呂らとともに王の宅に赴いてその罪を窮問した。その翌十二日には王は一言の申しひらきも許されずに自尽し、妃吉備内親王、子膳部王らはみずから縊れた。たゞ不比等の娘との間に生れた安宿王、黄文王、山背王、女教勝らだけが罪を許された。たしかに新しい転換期がおとすれていた。壬申の乱前後をもつて万葉集時代における第一の転換期とするならば、長屋王の変はまご

うことなく第二の転換期であつた。王の死は白鳳の伝統の杜絶を意味した。天平は光明子立后に象徴されながら、律令政治の解体期に入つて行。矛盾に引きさかれる人々の苦悶は、空虚の生きざまを文学の上に刻む。

倉橋部女王の長屋王を弔える歌、「大皇の命恐み大殯の時にはあらねど雲隠ります」(巻三、四四)。作者いまだ詳ならざる者の膳部王を悲傷める歌、「世間は空しきものとあらむとぞこの照る月は満闕しける」(巻三、四三)。やがて白鳳宮廷詩人の流れをくむ赤人は、回顧の詠嘆に現実の変移を記録するに至るであらうし——「昔者の旧き堤は年深み池の渚に水草生ひにけり」(巻三、三六)——、早くして金村は、人生の無常を従駕の作でかこつていた、「皆人の寿も吾もみ芳野の滝の床磐の常ならぬかも」(巻六、九三)。

長屋王の変の後、一月もたない三月四日に、武智麻呂は旅人をさしおいて大納言に進み、長屋王のあとを受けて政権を掌握した。そして六月二十日、左京職麻呂が朝廷に龜を献上、その背に「天王貴平知百年<sup>(註)</sup>」の文があつたところから、八月五日をもつて神龜六年を改めて天平元年とした。さらに五日後には「立正三位藤原夫人<sup>(註)</sup>為皇后」と、予定のスケジュールが見事に実現される。この光明子立后のことは、皇族外の立后として異例のことに属するが、長屋王打倒の意図がこゝにあつたらうことは、今日では疑う要のないまになつてゐる。

太宰府でこの度の変を知つた旅人は、たやすく事柄の全体を諒察することができたはずである。藤原四兄弟の中の大衛大将房前に、旅人は同年十月七日、梧桐の日本琴一面を贈つてゐるが、そのときの文面に「恒に君子の左琴とあらむ」とあるように、自身の帰京転

任を望む意をこめていたろうことはもとよりとして、房前が長屋王事件に立役者を演じていないらしいことも、旅人・房前の關係を保たしめた重要なポイントであつたらう。不比等の死んだ翌年元明太上天皇不弔の際に、右大臣長屋王と房前の二人が枕頭に召されて遺詔を賜わり、つゞいて房前に「内臣」たることの詔が下つてゐるが、こうして不比等の死後、長屋王と房前とが官廷の重鎮であつたという事情も、この度の變に房前が積極的役割をになつて登場しない理由となつていたであらう。それだけに政變後における房前の地位の弱体化が予想され、弱者のコースにかゝつて歩まれねばならなかつた旅人の生が、こゝでも期せずして同様の理をみずからのものとすゝる運命の皮肉を見るのである。

ともあれ、このような衝擊と転移の中で、旅人は何を考え、何をうたつたのか。悔しきはいきどおり以上に嘆きと無為を呼ぶ。「悽惻の意、歌にあらずは撥ひがたきのみ」(巻十九、四二九二左註、家持)という大伴家美字の源流を、擲掄と微苦笑の入りまじつた遺悶の作讀酒歌十三首(次掲)に認めることは、決して不自然ではない。家持の感傷と繊細はまだ生れていないが、表現以外に自己肯定の道がもはや残されていないという心的態度の無慘さと、その客觀的表象として文芸を考ふる、文芸の機能のさせ方とにおいて、両者はまったく同一の範疇に属する。このコースをつきつめて行くとき、やがて「万葉の終焉」がおとずれてくるであらう。しかしそこに行きつくまでには、旅人にはまだ幾分笑いが残つてゐる。息家持ほどにムキでなく、体をかわして傷痕を虚構・幻想の世界のものに遊離・変容することができる。権門に「進御」した梧桐の日本琴も、夢中の娘子と化さしむることによつて、現実關係のいやらしさからの

より少ない被害者に、自己を局限することができると。松浦河に遊ぶ(巻五、八三——八六)も、領巾鷹の嶺の詠(巻五、七二——七五)も、憂悶が求めた現実逃避の美的世界であつたことは、それが権門に呈上されようがされまいが、その軌においてまったく同断である。かなしくも憶良は松浦河の作に追和する(巻五六——六七)が、憶良の所行に、自己の恥部を見るとき羞恥の情を、旅人という生得の貴族精神は感じたことであらう。

さて、讀酒歌は次のように歌われる。

験なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし(巻三、三三六)

酒の名を聖と負せし古の大き聖の言のよろしき(同、三三九)

古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし(同、三四〇)

賢しきと物いふよりは酒飲みて酔泣するしまさりたるらし(同、三四一)

言はむ為便せむ為便知らず極りて貴きものは酒にしあるらし(同、三四二)

なかなか人とあらずは酒壺に成りにてしかも酒に染みなむ(同、三四三)

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る(同、三四四)

価無き宝といふとも一坏の濁れる酒にあに益さめやも(同、三四五)

夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあに若かめやも(同、三四六)

世のなかの遊びの道にすずしくは酔泣するにあるべからし

(同、三五)

今の世にし楽しくあらば来む生には虫にも鳥にもわれはなり

なむ

(同、三五)

生者つひにも死ぬるものにあれば今の世なる間は楽しくをあ

らな

(同、三五)

黙然をりて賢しらすは酒飲みて酔泣するになほ若かずけり

(同、三五)

時の移りも氏族の興亡も、いまなお強い働きかけをもつてかかれにせまる妻の死も——憤懣と失意の一切が、その原体験としての影をひそめ、讃酒歌十三首は、まさしく旅人世界のかなしみの戯面を描いている。白鳳的生が再び帰って来ることは絶対にないであろう。うつし身の哀歎は、酒によってそれを克服する以外にまったく道がない。酒がそうであるように、文芸もまた情を遣るための具でしかない。苦愚を負った未来は、こうして苦愚を負った過去につながり、現実の諸条件は個的抒情に還元されて、旅人の人と芸術の限界を作る。

太宰府芸苑の最大の盛儀といふ得る梅花の宴が催されたのは、天平二年(七三〇)正月十三日、帥の宅においてであった。つらなるもの旅人以下三十二人。筑前守山上大夫の顔も見える。主人の作、

わが范に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも

(巻五、六三)

旅人はあけて六十五才になっていた。「わが苑に梅の花散る」——旅人はしみじみと老齢を感じた。「ひさかたの天より雪の流れ来るかも」、しかしそれはどうにも仕方のないことではないか——。

かれは徳良の方をちらつと見た。そして自分は気はるまいと思つた。またきげんもなかつた。

徳良は本来守旧派の思想に立っていた。しかし、相撲使の従者となつて上京する途中にたおれた若者大伴君熊凝に代つてその志を述べ(巻五、八六—八九)、また官物輸送の海上に風浪と運命を共にした志賀の荒雄の妻の身になつて泣くことのできた(巻十六、二六—二七)——二六 徳良の中には、やがて貧窮問答の歌(巻五、八三・八四)を生み出してくる熱っぽい前への力が宿っていた。そうした庶民の生活にたちいる感覚が旅人には欠けていた。なるほど、「天平二年三月(月)辛卯、太宰府言、大隅、薩摩兩國百姓、建国以来、未曹班<sub>二</sub>田、其所<sub>一</sub>有田、悉是墾田、相承為佃、不願<sub>二</sub>改動、若從三班授、恐多<sub>一</sub>喧訴、於是随<sub>レ</sub>旧不動、各令<sub>二</sub>自佃焉」といった、旅人の九州の百姓に対する実状の把握を示す記録がまったくなくはないが、それが行政以上に血肉化したところから発しているとは、どうしても考えられない。旅人の詩の皮膚がそれを語らない。旅人の疲れは、見えないどこかで火花を散らしている、徳良とのそのような民衆をめぐつての対抗意識からも来ていた。旅人はふと家持のことを思つた。家持はやつと十四才になっていた。

旅人に第三の痛手が来た。妻の死、長屋王事件、そして今度のそれは、旅人自身の肉体にかゝわることであった。夏六月、かれは脚に瘡を生じて重態に陥つた。辺土と老齢の二つの条件は、旅人に死を覚悟させた。庶弟稻公と姪胡麻呂に遺言せんことを請うて許されたので、二人は九州に下つたが、幸に痛いは平癒するを得た。しかしわざわざ急使を馳せて上奏し、一族の南向を願つているところに、事態の重大を感得していた旅人の苦衷を察すべきである。

一旦死を覚悟した旅人にも、その冬遂に兼任大納言の報がもたらされた。翌三年正月二十七日には従二位に昇叙せられることになるが、藤原氏の地盤はもはや強固にして動かぬものとなつていた。すなわち四兄弟はそれぞれ、武智麻呂正三位大納言、房前正三位参議兼民部卿中衛中将、宇合従三位非参議の式部卿、麻呂従三位兵部卿で、旅人の従二位昇叙は武智麻呂を追い抜いたことになるが、かれらは五十六才から三十六才の働きざかりであつて、額齢おおうべくもない旅にとつて、藤原一族の膨張力は、和して同ずる以外に道がなかつたであらう。事実、房前と書簡や歌の贈答を交わしたことは前にも見たが、房前は正四位下権参議大伴道足の娘の舅でもあつた。麻呂は坂上郎女と恋愛関係があり、その贈答歌(巻四、三三——三〇)だけで万葉歌人の列に伍した人である。しかしそうしたかわりはいわば事の微少であつて、旅人がこれから帰京しようとする大和は、一切の人間関係を捨象した場においてのみ、かれの懐旧の情にこたえてくれる大和でしかなかつた。もし復権しうる——せねばならぬ——人間がありとすれば、それは亡妻以外の何びとでもないはずであつた。

還るべく時は成りけり京師にて誰が手本をかわが枕かむ

(巻三、四三)

京師なる荒れたる家にひとり宿ば旅に益りて苦しかるべし

(同、四四)

十二月六日に、書殿で送別の宴が催された。「あが主の御盞賜ひて春さらば奈良の京に召上げ給はぬ」(巻五、八六)と、憶良がこの席で敢えて私の懐を布べた。梧桐の日本琴を房前に贈つたおのれの所業に徴しても、憶良の気持はよくわかることであつたが、その行

為のあからさまが、旅人の精神と深い違和を持つていた。碧潭をおよぐ魚のように、それは美と虚構の銀光を放つていねばならぬ。恐らく自分は憶良のために一臂の力をかすであらうが、それにしても、憶良とは、いつにてもいつにても、何とはなほだしい野暮なのであらう。それが憶良に対する旅人の評価の結論であつた。憶良とは別の意味で、造観世音寺別当沙弥満誓も心に残る友であつた。「まそ鏡見飽かぬ君に後れてや旦夕にさびつつ居らむ」(巻四、五〇)外一首を満誓が贈つたのに、旅人は次の二首をもつて和えた。

此間にありて筑紫や何処白雲の棚引く山の方にしあるらし

(巻四、五五)

草香江の入江に求食る蘆鶴のあなたうたづし友無しにして

(同、五五)

そしていよいよ京に上るとき、府吏の中にいた遊行女婦児島との贈答歌がかわされる。娘子、「凡ならばかもかも為むを恐みと振り痛き袖を忍びてあるかも」(巻六、九六)、「大和道は雲隠りたり然れどもわが振る袖を無礼しと思ふな」(同、九六)。旅人、

大和道の吉備の児島を過ぎて行かば筑紫の児島念ほえむかも

(巻六、九六)

丈夫と念へる吾や水茎の水城の上に涕拭はむ(同、九六)

贈満誓の場合もそうであつたが、対象がある特定の人間に固着される時、旅人の歌は意外に生彩を放つてくる。一般的感情にとじこめて、とやかくのかゝわりを持つまいとする精神の高踏性が、心のひよわさを思わずもさらけ出してくる瞬間がそれ——固着のそのとき——である。そのひよわさにくさびをうちこむ人間の必ずしも多くなかつたことが、旅人にとって幸福か不幸かのいづれかであつ

## 祭

## 萩

たのだ。憶良のうちこみはしばしば的をはずれたが、満誓や児島は、その外延にかなしみの矢を巧みに放った。ことに児島のそれに答えてなした作の第二首は、大宰府在任期間中の感懐のおのずからなる綜合をなすものであって、旅人その人の全幅が、いさゝかの遅疑遲滞もなく、こころにくいまでに示されている。豊潤にして清らかであり、朗々、吟誦にたえるものである。旅人は喪失に立ちむかうことよつてのみ、自己の存在を確認することのできた一つの貴族精神であつた。憶良が獲得に向つてはげしく燃えたのと好個の一對をなしていた。児島に贈つた歌の第一首にも、先述したような、未来が過去につながつて行く旅人の心性がくつきりと浮きぼりにされて居り、喪失・向背の浪漫詩人旅人の、いたましい心の輪廓をうかがうことができる。それはまた、白鳳的なものゝ崩壊期における、のがれたい一つの様相でもあつた。

鞆の浦を過ぎ、敏馬を過ぎ、<sup>(註は)</sup>往路とは違つたところの帰路をたどりながら、旅人はやつと故郷の家に還り着く。

人もなき空しき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり

(卷三、三五)

妹として二人作りしわが山斎は木高く繁くなりけるかも

(同、三五)

吾妹子が植ゑし梅の樹見る毎にこころ咽せつつ涕し流る

(同、三五)

生得の素質は、鍛練苦行や思想の修得がもたらすものをはるかに越えて、本来の静けさにくぐもりのかなしみを放つている。こゝには虚構の敗北があるが、敗北することよつてしか、旅人は亡妻の生に、かにつながることができなかつたのである。よくもあしくも、

旅人はおのれとおのれにかゝわりのあるものだけを守つて生きる、そのような次元に棲息する作家であつた。

翌天平三年正月、旅人は從二位に叙せられた(既述)。寧楽の家にある旅人は、飛鳥の故宅を恋うてやまなかつた。

須臾も行きて見てしか神奈火の淵は浅みて瀬にかなるらむ

(卷六、九六)

指す墨の栗栖の小野の芽子が花散らむ時にし行きて手向けむ

(同、九七)

それは、大宰府にあつて、寧楽や吉野や香具山の故りにし里を恋うた(卷三、三一—三五)のと同じ心の構造であつた。現在は必ず過去の支えを必要とする。未来さえ過去につながつて行くのに、現在が過去にまつわつて行くのは、きわめて当然のことであつた。そしてその過去には喪失のすべてがしるがねのひかりを放つていた。

六十六年の生涯は、旅人に徐々に死を用意しつゝあつた。栗栖野の萩の花の散りすぎないうちに行ってそれを見たいという気持と、長い地方官を終えて無事に帰つた報養をしたいという心持と、二つが病床のかれにあつた。また旅人は口ずさんだ。

わが岳にさを鹿来鳴く先芽子の花嬢問ひに来鳴くさを鹿

(卷八、三五)

わが岡の秋芽子の花風をいたみ散るべくなりぬ見む人もがも

(同、三五)

神まつりは、家持が、一族の誰かゞ、受けついであらう。だが栗栖野の萩の花は——。旅人は庭前の花を人に見せたいと思ふとともに、飛鳥のふるさとの萩をいまひとび見たいと思つた。

「かくのみにありけるものを芽子が花咲きてありやと問ひし君は

も」(卷三、翌)——資人金明軍。旅人は遂に栗栖野の萩を見るこ  
とがなかった。思郷の焦点に、過去に向った一つの未来が、ぼっか  
りと残されていた。秋七月二十五日のことであった。

(註1) 四年十二月説をとるものに五味智英氏「大伴旅人序

説」(万葉集大成10所収)、五年説をとるものに武田祐吉

博士「万葉集全註釈」七、高崎正秀博士「大伴旅人」(日

本歌人講座1所収)などがある。

(註2) 土屋文明氏「万葉集私注」第五卷。

(註3) 尾山篤二郎氏「大伴家持の研究」、五味氏前掲論文、

高崎博士前掲論文等。

(註4) 窪田空穂氏「万葉集評釈」巻第三。

(註5) 川崎庸之氏「記紀万葉の世界」。

(註6) 川崎氏同前。尾山氏前掲書。

(註7) 延喜主計式に「太宰府行程上廿七日。海路卅日」とあ  
る。

(註8) 土屋文明氏「旅人と憶良」。

(註9) 高木市之助博士「吉野の鮎」、「古文芸の論」等。

(註10) 岸本由豆流が「万葉集攷証」でこのように推定してか

ら、諸注多くこれに従っている。

(註11) 続日本紀巻第十。

(註12) 同前。

(註13) 同前。

(註14) 帰途旅人が海路のみによったか、陸路をも併せ用いた

かは、論のあるところである。土屋氏「旅人と憶良」、

高崎博士前掲書などに所見がある。

### 古代文学 I

日本書紀成立における民族的傾斜の一影 賀 古 明

古代歌謡の一考察 戸 谷 高 明

——「ぬばたまの夜はいでなむ」——

古代文学研究における今日の焦点と欠点

(郵送による討論)

前野貞男・青木生子・太田善麿・伊原昭・尾崎暢映

谷馨・鴻巣隼雄

人麿歌集の筆録者 森 淳 司

——助詞「丹」の表記を中心として——

人麻呂歌集における用字の一特性 阿 蘇 瑞 枝

「山吹の花」雑感 町 方 和 夫

伝誦の作家たち 中 西 進